

大地の眺めのすすめ

佐々木 葉

フェロー会員 博士(工学) 早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp)

ひとつながりの大地の上に立って眺める風景。その当たり前のような眼前の眺めの意味を提示した中村良夫による1984年の論文を振り返り、多元化する風景論の出発点が大地の地域の眺めであることを確認した。その上で眺めるという行為自体の楽しみと大切さを素直に享受するための眺めのすすめを提示する。

キーワード: 眺め, 景観, 風景, 大地

1. 停滞のなかで

昨年、「地域およびその認識の風景を考えるためのノート」(以降前稿と呼ぶ)¹⁾をこの場に提示した。当時目の前にあった二つの課題、例えば度重なる豪雨災害を背景とした流域治水などのスケラブルで統合的な地域の課題と、リモートコミュニケーションが一気に進み距離と時間が不連続なまま接続する日常にある課題、これらは1年をへてより一層顕著になっている。前稿ではこれらをそれぞれ大地の地域(の課題)、オンラインの地域(の課題)と呼び、景観や風景によって考えていくためのアプローチを書き留めようとした。一年がすぎ、学生たちが取り組んだ研究によって気づかされ、確かめられたことがいくつかある。しかし、私自身としての論考が何か一步深まったか、前に進んだかといえ、残念ながら見出せない。ステイホームが続くなか毎日同じ庭を眺め、都会に出た時に目にする見知らぬ多くの人々に、それぞれパーソナリティと選択した振る舞いがあることを服装やリュックサックにぶら下がったマスコットから感じとり、緊急事態宣言の間隙を縫ってでかけた馴染みのフィールドに広がる風景に改めて感嘆する。その1年間に世の中でおきた事柄は走馬灯のように目の前を流れていった。書を読む速度は遅くなり、忘却は加速する。停滞の一年である。

その中であって、エコデモ財団が主催した連続シンポジウムとその後の記録作成をめぐる議論は、前稿での思いを少し別の角度から位置付けてくれる機会となり、想像力のフレームワークという役目を付与してくれた²⁾。

本稿では、その想像力を涵養する体験としても、眺めることとはどういうことなのか、という原点に立ち返って、眺めのすすめを説いてみたい。原点として再読する

のは、中村良夫先生の「大地の低視点透視像の景観的特質について」土木計画学研究・論文集のNo.1に掲載された1984年の論文³⁾である。地上に立つ私が周囲を眺めることで得られる体験の不思議と面白さ、そして奥深さ、有難さをここから納得し、往々にして難解になる風景論を飛び越えて、眺めるって楽しいね、大切だね、という実感を書き留めたい。

2. 中村1984論文-風景論の出発点

「大地の低視点透視像の景観的特質について」は1984年の土木計画学研究・論文集のNo.1、つまり創刊号に掲載された(以降「1984論文」と呼ぶ)。しかもその巻頭にある。この号では景観に関する論文が数編まとまって後ろの方に掲載されていることから、招待論文であったのではないかと推察する。ちなみにこの論文には参考文献リストがない。参考にしたが自分の言葉で言い換えているので引用の煩わしさを避け、一括して先行研究に感謝するとある。査読は通るまい。それはともかく、この論文では、航空写真と地上からの眺めを対比させ、大地に近い低い視点からの眺めは、こんなに不思議で面白いのだ、ということを一一つ理由をあげて述べている。冒頭に京都は宇治の宇治橋を中心とした周囲の航空写真と宇治橋から上流を眺めた写真を対峙して挙げ、航空写真では「形が流動的で抽象的に見えるのに比し、地上の景観はものの輪郭の印象が鮮明で奥行きのある独特の感銘を与える」とする。以降その当たり前に思えることの意味を論じていく。

内容に入る前に以下のことを確認しておきたい。1984論文に用いられた宇治橋周辺の航空写真と橋上からの写

真（以降これを「宇治橋セット」と仮に呼ぶこととする）は、中村の著作にたびたび登場する。また、1984論文には「見通しのムラ」、「借景庭の成立」と題された手慣れたスケッチが掲載されているが、これも同様である。

2001年「風景学実践編」⁴⁾、2003年NHK人間講座テキスト⁵⁾、そして2021年「風土自治-内発的まちづくりとは何か」⁶⁾。他にも見出せるかもしれない。少しずつ違いはあるものの（表-1）、風景を主題とした著作では毎回冒頭にこの宇治橋セットを用いて、面的にひろがる土地の状態を地上に近い低い視点から眺めることとして風景を設定し、それを出発点にして風景を愉しみ、目利きし、そしてデザインするためのあれこれ、つまり風景論が展開される。

なお1982年初版の「風景学入門」⁷⁾では宇治橋セットおよびスケッチは登場しないが、「風景とは、いうまでもなく、地に足をつけて立つ人間の視点から眺めた土地の姿である。飛行機や人工衛星から見た姿ではない。風景という現象の特色や不思議も、このあたりまえの事実深くかかわっている。」(p.28)と明言されている。このことを理屈として示し、事例として適した宇治橋セットが選定されたのが1984論文と考えられる。つまり「風景学入門」以来40年間、このスタンスは揺るがない。都市の街並みであれ、公園の人の景であれ、テクノスケープであれ、名所図会であれ、論じられる風景は、ここから始まる。そのことの意味は、現在再考する必要がある。つまり、前稿の「大地の地域」こそが体験されたものとしての風景の出発点であることの確認である。風景の意味論や仮想現実の風景論、災害と復興の風景論、基本的人権としての風景の意義など、風景論は広がり、社会的な価値としての議論が求められる⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。その時の「風景」の原点に何を据えておくべきなのか。こうした文脈のなかで1984年論文を位置付けたい。付言すると1984年に東工大の修士に入学した私が、はっきりとその時の腑に落ちた感とともに記憶に残る恩師の唯一の講義が、この大地の低視点からの眺めについての話であった。その意味

で1984年論文は、私個人の「風景を眺めることの自己了解の原点」であることに停滞の1年で気づいたのだった。

3. 眺めのすすめ

本稿の読者には1984論文をそのまま参照していただきたい。枝葉がそぎ落とされており、日本語として語られる他の著書での記述よりも論文的である分、かえって読みやすいかと思う。とはいえ、初学者や中高生に話して聞かせるにはやはり難解である。1984論文にて凝縮された大地の地域の眺めの特質とその理屈を直接的に伝えることは主眼から外し、眺めるって楽しいね、大切だね、という実感を持ってもらうための呼びかけとして、コンテンツのつまみ食いをシャッフルしたうえで、曲解を厭わず付言展開した、換骨奪胎の試みとして綴ってみたい。

(1) 眺めのすすめ

眺めることについて考えてみない？

風景や景色を眺めることは、好き？。きれいな景色はわざわざ出かけていかないと見られない、という声も聞こえて来そう。きれいともでいかなくても、そもそも広がりのある景色を日常生活の中では見るのが難しい。窓を開けても隣の家の壁だったり、通りを歩いても建物や看板はごちゃごちゃとして電線が空を横切ったり。だから大地の眺めなどと言われてもピンと来ない。確かにそうかもしれない。けれどもテレビ番組のおかげもあって街のなかの見えづらい地形に注目したり、段彩図という微細な高低差を色鮮やかに描き出した地図がポピュラーになったり、そもそもハザードマップは地形の現れだったりする。そういう意味でもつながっている大地という感覚をもちながら、地域のことを考えてみることもあっていい。その時、地図やグーグルアースもいはいけれど、普通に周囲を眺めることから始めるのはどうだろう。さ

表-1 中村良夫の著作における低視点透視画像に関する記述

年	書名	掲載章	章タイトル	節タイトル 見出し	宇治橋セット		スケッチ	
					航空写真	橋上からの写真	借景庭	見通しのムラ
1982	風景学入門	第1章	日と風景-風景の視覚像と心像	神の視点と人の視点	—	—	—	—
1984	1984論文				「空中写真」 *南・上流が上	「地上で見た大地の姿」 *橋の部分は含まれない	「借景庭の成立」 *作者名なし	「見通しのムラ」 *作者名なし
2001	風景学入門・実践編-風景を目きする	序章	風景はどのように立ち現れるか	視点で作る風景	「右下は宇治市の空中写真。矢印の宇治橋から上流を見たのが上の写真」 *南・上流が上/パノラマ写真・高欄と擬宝珠	—	—	—
2003	NHK人間講座テキスト 風景を愉しむ風景を創る-環境美学への道	第1回	山河のたたずまい	大地の肖像-低い視点の不思議	「宇治市上空から見下ろした地上-墨流しのように形が定まらず混沌としている(撮影/国土地理院「宇治」)」 *北・下流が上	「宇治橋から上流を眺める-大地は、鮮やかなスカイラインを描きながら個性的な山々が立ち現れる。そしてはつきりした遠近感の出現」 *橋上のバルコニーが強調	「借景の原理 庭(視点場)と山の偶発的な結びつきがつくる風景の構造(図/斎藤潮)」	「迷路の中を開く遠望(図/斎藤潮)」 掲載箇所は第2回
2021	風土自治-内発的まちづくりとは何か	第7章	風土の詩学	風土の諸相-風土の胎内景を探る 低視点風景の不思議-天・地・人の契り	「高空からみた大地(国土地理院)」 *北・下流が上、山側に矢印が大きく伸びる	「地上の風景、風景の中の「私」(宇治橋からの眺め)」 *2003に使われた写真が左右反転しバルコニーに人のシルエットがモンタージュ	「借景の原理(斎藤潮氏による)」	—

—:掲載なし 「」:図版タイトル *:補足メモ

らにその準備運動として、風景や景色を眺めることに心を向けてみるのはどうだろう。あたり前のように眺めているけれど、周囲がこういう風にみえる、というのは、なんだかとても素晴らしいことかもしれないから。

眺めのなかの形

眺めはいろいろなものでできている。手前の植木鉢、右の方にある家、その屋根を半分隠している木、その先の道に立っている電柱と電線の一部、道の脇の斜面、さらにその奥にチラッとみえるよくわからないけど建物の一部、そして空。スケッチしようとした時に描くそれぞれのもの、かたまり、輪郭線。植木鉢は実際の形は丸いけれど、絵に描くときは楕円にする。家の屋根の面も実際は角は直角だけれど斜めに見えるからそう描く。電柱とその奥の建物らしいものは実際には離れているけどスケッチブックの上では隣同士になる。誰も不思議に思わない。でもこの見え方は、凸凹（でこぼこ）した地面の上にいろいろなものが乗ったひとつながりの大地を人の目線で見ているから、なんだよね。航空写真にもひとつながりの大地の様子が現れているけれど、こんな見え方はしない。誰も不思議に思わないこの見え方について、もうすこし考えてみよう。

まず、この見え方は、ちょっと移動すると大きく変わる。樹木が家の屋根を全部隠してしまったり、電柱が画面の真ん中でできたり、さっきは見えなかった屋上広告が見えてきたりする。スケッチしようとするときは、ここからだとはバランスが悪いからすこし移動して、いい感じにそれぞれが配置されるような場所を探す。そこにある樹木も家も電柱も何も変化していないのに、自分がちょっと移動すると見え方が変わる。これも当たり前のことだけど考えてみると凄い。好きなものがよく見えて、あまり良くないと思うものを目立たなくさせることができる。自分がちょっと移動するだけで。「ねえねえ、来て来て、ここからだとはよく見えるよ!」「ほんとだ!」。これはつまり、「ここ」を見つけたあなたがその眺めを作った、ということ。あなたがいなければ、その眺めは存在しない。そして時には、沈んでいく夕日を手で摘んで口に入れてるように見せることもできる。山の上にあるお堂を掌の上に載せることもできる。友達にバッチリ写真に撮ってもらえればね。絶対近づけないほど遠くにあるものを、眺めの上では隣同士に並べておくことができるのだ。その組み合わせの良し悪しは、それが役に立つとか安全だとかいう真面目な理由ではなくて、仲間どうしで面白いねと価値を共有できるかどうかで決まる。

移動していくと見えていたものが見えなくなったり、その逆もあつたりする。見え続けているものでもさつき

とは見え方がずいぶん違ってくる。それは見ている世界が、ひとつながりにつながっているから。お芝居の舞台道具みたいで表面だけある書割りではなくて、立体的で大地の広がりの上にちゃんと乗っかっているから、だよ。遠くに見える建物も、そこまでの道筋は直接見えなけれどこの地面から繋がった先にある。そのことを疑わない。でもその広がった大地の上に載っている道や建物の状態があまりにごちゃごちゃしていたり、なぜか唐突に始まったり終わったり、時にはわざと騙し絵みたいに見せようとされると、位置関係、遠近感や奥行き、まとも具合が眺めのなかで掴みづらくなってくる。こういうカオスのなかに偶然面白い眺めを見つけることもできるけれど、それはお日様を摘んだ写真と同じで、イリュージョンっぽい。せつかくひとつながりの大地の上に生きているのだから、その大地ならではの見え方を楽しんでみよう。

私からつながる大地の眺め

実際の眺めの面白さは、ずばり奥行き感にある。写真や絵画でも奥行きや遠近感をなぜか私たちは感じる事ができるけれども、実際の眺めでは、見ている自分の体から始まって、ずっと遠くまでひとつながりになっていることが、なんとと言ってもリアルだ。二つの目で見る角度の違い（両眼視差という）から距離を感じとって、近いか遠いかを見分けることができるけれど、500m以上離れるともうこれが効かなくなるらしい。なのでそれより先の森や山の遠い近いは、形の重なり具合や色の霞み具合で感じとる。おかげで天気や時刻によって同じ山が近く見えたり遠く見えたりするのを楽しめる。もう一つ、自分の体からはじまって連続的につながっている、ということは、見えている世界に手を伸ばして触ったり、足を踏み入れて歩いて行ったりできるってこと。実際にそうしなくてもできそうな感じがリアルにする。この点も重要。バーチャルリアリティーが一所懸命この感じを出そうと努力しているのは、この感じが大事だからこそでしょう。以上が見る側の話。

次に見られる側のひとつながりの大地の方を考えてみる。これはなんといっても地形の話になってくる。まず山の形。航空写真や地図では山の形は見えない。地上から1mちょっとの低い位置から眺めるから地表の凸凹が山の形になって、スカイラインや稜線として見える。遠くから見れば見るほど、山の斜面は垂直に立った立面図みたいに見えてきて、その輪郭がはっきりしてくる。手前の方はボワッと横にひろがった面として見えているのよね。当然ながら見る位置によって形は変わる。静岡県側から見る富士山と山梨県側から見る富士山はけっこう違う。静岡の人は静岡から見た富士、山梨の人は山梨から

見た富士の姿がそれぞれ一番だという。いろいろな山に対してそれぞれここから見た姿がいいねとみんなが思った場所があって、そこに鳥居が建てられたりする。一方凸凹の凹の方はなかなか形として浮かんでこないけれど、この凹んだところが奥行きを与えてくれる。薬研坂と呼ばれる下ってまた登る坂は街中でもぐいんと進んでいく感じがするでしょう。さらに凹んでいるから見えない、手前にあるものの影になっているから見えない、というように、私たちは見えている眺めのなかに見えていない部分があることも知っている。そこはなんとなく囲まれていて、行ってみたら落ち着くような気がしたりする。ふところなんていう言葉が似合いそう。距離感があってそこで動ける体の感覚もある感じ。

見られる側のひとつつながりの大地は複雑に凸凹が組み合わさってできている。特に日本の大地は、けれどもこのすごく複雑な凸凹は、眺めのなかでは、どこかが強調されてどこかが隠れて見えなくなったりするので、結構わかりやすい感じに要約されている。だから私たちはその形を覚えておくことができる。一つ一つの形そのものとして覚えるだけじゃなくて、なんかこんな感じという体の感覚も一緒に覚えていられる。これはとてもありがたいことだね。地図はよく読めなくても、あの山は何、ここはどこ、というのは眺めを見ればなんとなくわかるし、それを眺めている自分の体の感覚、つまり自分がちゃんとそこにいたって感じも蘇る。

眺めることで得られること

意識するしないにかかわらず、誰もが周囲を眺めている。それも地面に近い位置から。そのことが、実はなかなかすごいことなのだ、というのがだんだん分かってきた。私という見る側の話（「ここ」という場所を選ぶとか、移動するとか、奥行きを感じる知覚の仕組みとか）と、ひとつつながりの大地というみられる側の話（複雑な凸凹の組み合わせ）。この二つがあって初めて風景となる。ここで大事なことは、見られる側の大地に私がちゃっかり組み込まれている、ということ。それが画面越しにみる眺めとの違い、室内やその近傍あたりの狭い範囲での眺めと違うところ。

大地の上に立っている私たちは、ひとつつながりの大地のそれぞれの場所にあるものを、まとまりごとに区分し、輪郭線を与えて、距離と奥行きを感じをともなって、見えない部分も想像しながら、構図としてバランスした眺めに要約して見る。そこを運動していくような体の感覚も伴いながら見る。それは、きれいだなあ、かっこいいなあ、という形との出会いの感動と、気持ちいいなあ、楽しいなあ、という環境のなごみ具合が体にくれる心地よさ、この二種類のたのしみを与えてくれる。眺めの形

と向き合っているときは、なんだかその形つまり山とか樹木とかもこっちを見ているようで繋がりをを感じる。一方心地よさを感じているときは、自分を包み込みこんでくれるすごくベーシックな安心感がやはりいいなと思う。もちろんどちらか一方がグッと強く感じられることもある。残念ながら両方ともまったく感じられない眺めも少なくない。それは見られる大地のほうに問題があることが多いかもしれないけれど、見る側に原因がないともいえない。まず、そもそも、じっくり眺めと向き合っているかな。形は一瞬でみえるとは限らない。眺めとは、長い目、なのだからね。形は寡黙だったりする。何度も見ているうちにあるとき急にふっと浮かび上がって来たりもする。チラ見してダメって決めつけないようにしよう。さらに心地よさの方は、そもそも想像して得られる心地よさだから、想像してみないと得られない。眺めのなかを歩き回ったり、見えない物かげやその向こうにありそうな眺めを感じてみたりする。手がかりになりそうなものを探してみる。目を閉じて眺めてみる。息を吸いながら眺める。息を吐きながら眺める。（多分この二つで見え方がちょっと変わる）。言葉にするのをちょっと待つ。そのうちじわじわとした感じがやってくる。時間をかけて眺める。つまり風景に浸ってみる。

ひとつつながりの大地は、地上の目線から眺められることで、そのハッとする風貌とじわっとくる安息によって、眺めるあなたの友となる機会を待っている。

参考文献

- 1) 佐々木葉：地域およびその認識の風景を考えるためのノート、景観・デザイン研究叢書集 No. 16, pp. 471-479, 2020
- 2) 土肥真人, 佐々木葉, 杉田早苗, 福永順彦, 矢口哲也, 山下三平, 山本真紗子：新しい都市の形-世界が変わるために-日本のエコデモのための8つのフレームワーク, エコロジカル・デモクラシー財団, 2021, 6章 pp. 95-110
- 3) 中村良夫：大地の低視点透視像の景観的特質について, 土木計画学研究・論文集 No. 1, pp. 1-10
- 4) 中村良夫：風景学実践編-風景を目利きする, 中公新書, 2001
- 5) 中村良夫：NHK人間講座テキスト風景を愉しむ風景を創る-環境美学への道, 日本放送出版会, 2003
- 6) 中村良夫：風土自治-内発的まちづくりとは何か, 藤原書店, 2021
- 7) 中村良夫：風景学入門, 中公新書, 1992
- 8) 木岡伸夫：風景の論理-沈黙から語りへ, 世界思想社, 2007
- 9) 港千尋：風景論-変貌する地球と日本の記憶, 中央公論新社, 2018
- 10) 島谷幸宏, 中井祐, 中村晋一郎：災害と景観・デザイン-東日本大震災から10年, そして頻発する災害-, 第16回景観・デザイン研究発表会シンポジウム, 2020, 12.4